

関西観光・文化振興計画検討委員会(第2回)の概要について

- 1 日 時 平成 26 年 10 月 3 日(金) 15:00~17:00
- 2 場 所 関西広域連合本部事務局大会議室
- 3 出席者 大橋昭一委員(座長)、河内厚郎委員、坂上英彦委員、橋爪紳也委員、
福島伸一委員
(そのほか構成府県市、連携団体、関係団体から出席)
- 4 内 容
 - (1) 報告
 - (2) 中間案(素案)について
 - (3) 意見交換委員の主な意見は以下のとおり。

【計画全体・「はじめに」について】

- 策定後3年間で環境が大きく変化しており基本的に大フォローの風が吹いている。3年前は総論だったが、観光が国の成長戦略に入り、今年は成長プログラムが出てきているので、今回はより具体的な施策を入れていくステージに来ている。世の中は様変わりしており、新しい環境のもとで作り直すくらいの気持ちで、そういう視点が必要である。
- 志を前回より高く掲げてほしい。3年前とは違うステージに入っている。従来の書きぶりだけではなく、例えば、観光は関西の基幹産業になるのだというような文言が冒頭にあってもよいのではないか。
- 今回の計画では国際観光だけを強調しているが、国内観光はどう考えているのかとなる。国際観光に特化しているということを明記すべきである。
- 観光施策と文化施策の温度差が表現において如実に伝わってくる。ほとんどが観光施策で、文化施策は予算的にもこれといったものが見られないということを集大成した結果になっているのではないか。観光と文化を一緒にとりまとめて計画にすること自体に限界がありそうに感じている。

(文化について)

- 文化とは何だというと、伝統文化だと受けとめると思うが、実はもっと幅広いということを入れて、そんなに肩に力を入れなくて楽しむのですよというニュアンスがほしい。文化は日本人にとっても外国人にとっても非常に身近なものだと、少し広げた方がよい。その一つとして、食文化をもっと前面に出すような構成にしてほしい。
- ライフスタイルツーリズムの振興は非常に重要な概念。シンガポールではライフスタイルのハブを目指している。日本の食文化・関西の食文化を世界中に広げていくというような志が必要。日本の食文化のブランディングが必要で、文化や産業の施策とも連携できるもの考える。
- 文化という言葉の整理が必要。文化という言葉は中国語にはない言葉で、江戸時代の年号。英語のカルチャーをなぜ文化と訳したのかよくわからない。明治の初めに政府が文化制度という指令を出したが、これは文書化せよという意味だった。それが明治10年頃を過ぎると今のカルチャーという意味で何となく使われ出した。日本語に相応しいのはアーツ、学芸に近い。だから文化は堅苦しいような意味になる。本来はネイチャーと対語でカルチャーがあって、人間の手が加わっていないものがネイチャーで、加わっているものがカルチャー。そういう意味では、今、観光を起爆剤にして文化を本来の意味に戻すチャン

ス。生活、経済、政治、すべてがカルチャー。計画に本来のカルチャーとその意義を2、3行で入れたらどうか。

- 他の国々のスタンダードは観光税で文化・芸術施策を展開するというのが標準的なやり方だが、日本は税を取っておらず、文化施策と観光との連携も非常に細いルートでしかなく、観光寺院になれば儲かるが、そうでないお寺は檀家も少なくなって大変な状態にある。観光ばかりに心を奪われていると足元の文化が崩壊していることを忘れてしまうのではないか。地方の祭りはほとんど都会から帰ってきて支えており、徐々に消滅する方向になっている。とにかく人が来たらいいではなく、文化の吸引力が低下している事実をつかんでおかないと、50年先は非常に現代的な街だけが残ってしまうということにならないよう注意が必要。
- 行政としての文化の守備範囲を明確にしておく必要がある。お茶をたしなむ人もお花を生ける人も少ない。和食も盛んだが、和食を作れる人は少ない。文化の底上げを行政はしっかりやるべきではないか。

【「1 計画の目的・期間」について】

- 計画の期間は2020年までではなくて、「関西ワールドマスターズゲームズ2021」が開催される)2021年までに変えてほしい。

【「2 現状と課題」について】

- 国際観光の課題として「インバウンド市場の変化」では、空路の確保だけでなく、クルーズにも触れるといい。
- 「文化振興」と対とするなら「国際観光」も「国際観光の振興」などとするべきである。
- 文化振興の現状の「関西は、古くから日本の都、また商都として栄え…」のところに、もう一つ精神的なキャピタルみたいなのが一番長くあったというような、精神的な雰囲気を表す文言を入れてほしい。
- 大阪の代表的なホテルがデザインを和風に改装してきている。日本に来る人はそれを望んでいるのだから、それで当然。それらしさを感じさせるデザインなどそういう文言を入れてほしい。関空ができたとき、その評判は悪くはないのだけれど、あまり日本を感じさせないという意見があった。以来、少しずつ日本的なデザインが入ってきている。日本文化の発信に大きな役割を担う関西といっているのだから、日本らしいという当たり前なところを入れてほしい。例えば、大阪市内でも古い街並みが残っているところには外国人観光客が来始めている。
- ホテルにはシアターガイドとかミュージアムガイド等が少なく、どこに連絡したらいいのかわかりにくい。これをきっかけにさらに充実して欲しい。ヨーロッパの方がナイトツアーは洗練されている。日本には幸いコンテンツはあるが、観光化が発達していない。

【「3 計画の基本方針と目標」について】

- 数値目標が1,000万人から800万人に減ったように見えるので打ち出し方を変えてほしい。
- インバウンドを成長産業の一つにしようというのが切り口であるので、目標に経済効果の数字をぜひ入れてほしい。
- 数値目標の書きぶりを熟考してほしい。国の入り込み客数の比例で関西の割合をのせるというのが根拠だが、加えて、何らかの志のようなところがあってもよいのではないか。なぜこの数値目標を掲げるのかというバックグラウンドとなる考え方が必要。
- 経済的効果の数字が示されるべきで、観光産業を振興するという視点が必要。例えば、シンガポール政府観光局ではクオリティツーリズムという概念で、量だけでなく質に関する振興していくという考え方が示されており、2010年は日本円ベースで1兆2200億円、これが2013年には1兆9035億円になった。このGDP比が2010年で6%、2013年ベースで6.7%だったので、3ヶ年で0.7%伸びた。この計画案にも観光産業は世界経済の1割を占めていると書いてあるが、日本は観光産業の対GDP比が1.9%程

度であるということ把握すべき。フランスの観光業はGDP比 3.7%、英国は 3.4%で、ヨーロッパ並みにするとしても、今よりも 2%くらいは伸ばせるというようなことも示すことができる。私が座長でまとめている京都市の次の観光の振興計画では観光消費額1兆円という数値目標を出した。計算の仕方と掲げ方は難しいかもしれないが、質の評価をできるようなものが示されるべきであり、それが世界のグローバルスタンダードだと思う。

- 人数ばかりが増え過ぎても、観光シーズンに観光を楽しめない観光地は世界中にある。量ばかり追うのではなく、このペースでインバウンドが増え続けたら、関西の主要な観光地は大混雑するところが出てくるであろうということも想定して数値目標を考えないといけない。一部に集中し過ぎないよう他のエリアにも行ってもらえるような施策が必要になってくる。
- 将来像について、現計画の継承で「アジアの文化観光首都」としていることについて、世界中の人が関西にあこがれるというような考え方をキーワードに落とし込んでほしいが、変更できないのであれば、事務局に委ねる。
- 「アジアの文化観光首都」の文言は再検討を要する。確かに大阪はアジアの…と言ってきたが、もう少し議論を深めてもいいのではないかと思う。

【「4 目標達成のための戦略」について】

- 戦略テーマ I の①「関西の魅力あるオリジナルを世界に発信」のところで、2つ目にある項目「連合域内の広域周遊ルートの提案・発信」を最初にもってくるべき。海外からの観光客はまず関西で収容するのだということをまず一番目に述べるべき。
- 「KANSAI国際観光YEAR」の切り口(食、クール・ジャパン)は良いと思うが、広域連合がテーマをつかってプロモーションをやって終わっているのが現実。例えば、関西の「祭り」は1年中やっている。たとえば1年間の関西の祭りのカレンダーを作って、それを海外に発信し、一つの関西のキラコンテンツにする、といった切り口でもうふたひねりすることで各地域へ経済効果も含めて、活気をもたらすのではないか。3年前にはなかった地域創生を政府が切り口として出しており、何かそういうところを少し補強してほしい。
- 戦略テーマIVのインフラ整備の充実として①「関西国際空港の魅力向上」を掲げていただいているが、「高速鉄道」の切り口を入れてほしい。鉄道は大量輸送が可能で定時性が高い。
- 危機管理の考え方が抜けている。観光は単年度で最も災害等の影響を受ける分野の一つ。災害があっても関西は安心・安全に観光してもらえるところだというような施策を考える案を示すべき。例えば、広域避難場所の設置や津波の情報提供・避難誘導など各自治体で考えられているはずであるので、広域連合としても入れるべきだ。災害時に機能するためには平常時にも使われていることが大切。FM COCOLO は、阪神・淡路大震災の後に多言語放送として生まれた。犯罪への対応でもツーリズムポリスやタクシーの中での緊急時の多言語対応など、世界標準はどこにあるのかをオリンピックに向けて考えていかないといけない。
- 広域連携を進める上で、各自治体が連携するためのプロジェクトが必要。なぎさ海道は、各自治体がそれぞれの名称で予算化して整備が進められたが、広域で見ると大阪湾ベイエリア開発推進機構が中心となって、一つの考え方のもとに行われた。観光でもこういう事業が必要で、マクロでみると1つの事業であるというようなものに広域連携の意義がある。例えば、ジオパークや瀬戸内海の連携やクルーズも含め、海の観光開発を一つの概念でまとめていくことも必要。世界遺産も、プロジェクト型で連携を強化していくことを考えるべき。彦根城とか、百舌鳥・古市古墳群などこれから目指すものがあるが、既登録のもの概念を組み替えて追加するなどということも世界では例がある。
- 歴史ある温泉遺産なども入るのではないか。
- 来年は日本で最初にノーベル文学賞候補になった谷崎潤一郎没後 50 年で、作品の舞台となったマツ

ブなどを作っている。日本文学を関西から発信することを長くやっていくことが必要。

- 日本酒では、奈良と伊丹がそれぞれ清酒発祥の地と言って盛り上がり、結果的に協力して清酒発祥の地は関西というようになった。このように、提携できるもの、具体的にやれるところで網をかけて段階的に仕掛けていけばかなりのことができる。
- 関西クールジャパン事業について。関西を頭につけて文化の戦略をメリハリつけてやることは良い。これをふくらましてやっていったらどうか。観光を担う人材が育つのか心細い状態。
- 日本がものづくりで実質世界一になったきっかけは QC サークルである。QC サークルとは、従業員が仕事の後に残業手当もなしで集まり、みんなで知恵を出し合って、改善・改良を進めるもので、これがメイドインジャパンのブランドを作ってきた。観光が世界一になるには、観光業界でも旅館等で QC サークルのようなことを実施することはできないか。

【「5 実現に向けた進め方」について】

- どこが推進し、誰が事業資金を出すのか、ということが抜けている。文化の予算が 400 万円しかないことについても、一工夫してほしい。各自治体は、自分のところでやる観光予算だけでなくオール関西の事業にも予算を付けることが必要。
- 観光産業に関わる人材が不足している。大学と連携して観光産業に関わる人づくりや、ボランティアやNPOなどとも連携を取っていくということにも言及してほしい。
- 規制改革・権限移譲等のところでは、具体的なことをリストアップして検討してほしい。地域限定通訳案内士の認定を関西広域連合がするようなことなど。
- 規制緩和としては、この間議論されてきて課題が多いのが旅館業法の緩和。既存の旅館業の方々には緩和すると問題が見えてくるので反対される方が多いが、これほど外国人観光客が増えて連泊の方も増えるので、宿泊施設が今後どのような需要になってくるのか、調査をきっちりしていかなければならない分野。新しい宿泊施設のニーズがどのあたりにあるのか、経済界と共にきちんとやっていくべき。大阪の例で見ると、外国人観光客が増えて日本人が予約を取りにくくなったグレードのホテルもある。一方で満室になっても経営が苦しいところもある。マーケットリサーチをしたり諸外国の制度を見ながら、数値目標どおりになったら関西の観光地はどうなるのか予測しないとイケない。過剰に集中するシーズンとか、場所とかに対して考えていくことも行政の大事な仕事で、緩和もだが逆に規制するべきこともあるのではないかな。
- 今の広域連合の観光部署としては、中古の軽自動車を運転していて、スーパーカーの走りを期待されると、カーブでクラッシュするのではないかという状態。徐々に乗り換えをうまくしていくことでないと難しいのではないかな。関西がなぜスーパーカーに乗れないのか。関西は観光誘客では日本の中で最も遅れている圏域だと思っている。関空はあるが、これを支える力は全く弱い。最も大きいのは民間が金を出さない、集まらない。こんな状態ではスーパーカーは買えない。官民の連携組織をどう変えていくかという問題を抜本的に解決しないと、今日皆さんがおっしゃった方向に舵を切るのはなかなか難しいのではないかな。官民あわせて、まず観光の啓発活動から出発して大きな財布を持てるようなフレームづくりが必要ではないかな。
- メリハリのある計画を作り、ポイント絞って、いくつかの事業にシンボリックに取り組んで、それが次の展開につながっていくというようなことを考えてはどうか。

関西観光・文化振興計画検討委員会(第2回)出席者名簿

所属団体	所属・職名	氏名(敬称略)
滋賀県	商工観光労働部 観光交流局 しがの魅力企画室 主査	恩地 衛
	総合政策部 文化振興課 副参事	梅村 徹弥
京都府	商工労働観光部 観光政策監	平井 裕子
	商工労働観光部 観光課 広域観光担当課長	亀澤 博文
	商工労働観光部 観光課 副課長	森田ひとみ
	商工労働観光部 観光課 主査	中村 政幸
	商工労働観光部 観光課 副主査	澤田 稔
	文化環境部 文化政策課 広域文化振興担当課長	大同 武
	文化環境部 文化政策課 主事	山根木菜央
大阪府	府民文化部 都市魅力創造局 文化課 参事	星住 哲二
兵庫県	企画県民部 芸術文化課 事業調整班長	山本 陽子
和歌山県	知事室 政策審議課 企画員	山東 良朗
	企画部 企画政策局 文化国際課 主査	井本 ゆか
鳥取県	生活環境部 緑豊かな自然課 山陰海岸ジオパーク推進室 課長補佐	大江 誠二
	文化観光スポーツ局 観光戦略課 課長補佐	藤田 博美
徳島県	商工労働部 観光国際局 国際戦略課 交流戦略担当	祖上 弘喜
京都市	産業観光局 観光 MICE 推進室 室長	高畑 重勝
大阪市	経済戦略局 観光部 観光課 担当係長	鈴木 貴司
	経済戦略局 文化部 文化施策担当課長	松本 孝史
堺市	文化観光局 観光部 観光推進課 主査	丸澤 廣芳
	文化観光局 文化部 文化課 課長補佐	藤井 謙治
神戸市	神戸市産業振興局 観光コンベンション部 観光コンベンション課 インバウンド・観光プロモーション担当係長	藤田 修司
	市民参画推進局 文化交流部 文化振興担当係長	島崎 宏道
奈良県	観光局観光プロモーション課 主査	宗京 典子
文化庁	文化芸術創造都市振興室	小川 博子
関西広域連合	本部事務局 企画課 主査	西尾 佳子
公益社団法人 関西経済連合 会	産業部 参与	高橋 保裕
	産業部 参事	坂本 浩之
	産業部 副主任	中西 康真
関西地域振興財 団	常務理事	安竹 素之
	企画2部長	吉村 昌泰
	企画2部 部長	土井 康敬
新関西国際空港 株式会社	航空営業部プロモーション推進グループ 副部長	筒井 千恵